

巻頭言 「ヴィザヴィ」

宇野 元

生まれたばかりの幼子は、なにも見えていないと人は言うが、彼女は両目をあけてぼくを見た。彼女はいかにもちっちゃな存在だった。しかしぼくが抱きかかえているあいだ、両目をあけていた。たしかに、ぼくを観察していたわけではないだろう。記憶は過去の出来事を実際以上に意味深く思わせるものだ。しかし、彼女はまっすぐぼくの目をみつめていた。このことは心に留めるに値する。あのとき、それを体験したのは幸いだった。人間の顔ほどふしぎなものはない。このことをぼくは今、もう間もなくこの世を去ろうとしている今、つくづく感じているんだ。……子どもを眺めて抱くとき、ぼくらは自分に責任があるのを感じる。どの人間の顔も相手を求めている。ぼくらは人間の顔のなかにある単独性、気丈さと孤独をみとめずにはいられない。それが最もはっきり現れているのが幼子の顔だ。

(マリリン・ロビンソン『ギレアド』より)

長女が生まれた時のことを思い起こします。夏の朝。連絡がきて、病院へ駆けつけました。早朝の光が病院の庭の芝を染めていました。看護師さんから生まれたばかりの彼女を渡された時、彼女の目がすぐ前にありました。こちらを向いて。ギレアドのこのくだりを読むとき、あの時の体験と重なるものを感じます。顔と顔を合わせる。目と目が会う。それはありふれた体験のようにも思われます。なにかの折に、ふと見つめ合う。互いに瞳のなかのその人を覗き込む。それは神秘的な体験でもありますね。「人間の顔ほどふしぎなものはない」「相手を求めている」「単独性」「気丈さと孤独」。

鏡に向かって表情をつける若い人たち。鏡に向かい、話しかける。笑いかける。傍らで、ふと思ひめぐらします。誰に対してそうするのだろうか？ 自分に？

人間は一人。孤独。

こう言い換えることができるでしょう。

人間は、神の前に一人。

私たちが一人なのは、私たちが神と水いらずであるため。vis-à-vis ヴィザヴィ、face to face フェイストゥフェイス の関係にあるため。

……ひまわりが、太陽に向かってるように。神に向かうように。